ツォンカパの中観思想における帰謬派独自の縁起説

福　田　洋　一

1. 問題の所在

ツォンカパの中観思想では，実在論と中観派の根本的対立は，自性のない空なるものにおいて，輪廻から涅槃に至るまでの諸存在（chos thams cad），すなわち縁起するものの設定が成り立つと考えるか（中観派），成り立たないと考えるか（実在論）という点に求められる．言い換えれば，実在論は自性と縁起とが矛盾しないと考え，中観派はそれらが矛盾すると考える[1]．一方，中観内部の自立派と帰謬派の対立は，諸存在がそのもの固有の特質によって成立していること（rang gi mtshan nyid kyis grub pa）を認めるか、認めないかという点にあるとされる。自立派は，意識に現れることによって設定される存在が言説有であるが，しかし，それは同時に対象それ自身の側でも成立しているものであると考える．ツォンカパは帰謬派の立場から，このような自立派の主張を，「対象自身の特質によって成立しているもの（rang gi mtshan nyid kyis grub pa）」を言説において認めていると捉え，それが自立派をも含めたすべての実在論に共通する主張であると分析する．もちろん帰謬派は，そのようなものを言説においても承認しない[2]．

以上の内容について筆者はこれまでツォンカパの主張に沿った形で分析を行ってきたが，その際に，自性とは何であり，縁起とは何であり，そのもの自身の特質によって成立しているとはどのようなことか，などを端的に問わずに，それらの相互関係について分析をしてきた．本稿では，それらの直接的な理解を得るために，帰謬派の立場から，縁起と，それと背反関係にある自性との実質的な内容を考察したい．

2.『ラムリム』における問題提起

上述したように，中観派は，縁起と自性は矛盾すると考えるので，その論理的帰結として縁起を根拠として自性が存在しないことを論証することができると主

張する．その議論の途中で，否定対象である「我」ないしは「自性」とは何かを説明しながら，ツォンカパは次のような但し書きをしている．

自立的なもの（rang dbang ba）とは，〔対象が〕それ自体で成立しているものとして現れているとき，〔それを把握している〕それらの知に，他のものに依存していないものとして現れ，また現れているとおりに成立しているものである．しかしながら，他の因縁に依存していないものを指して〔自立的なもの〕と言って，それを否定するとすると，〔それは〕仏教徒にとっては〔改めて〕論証する必要のないことであり，それを否定しても中観の見解が得られるとすることはできない〔であろう〕．それ故，対象の上に〔ある〕，そのもの自体として（rang gi ngo bos sgo nas）自立的である（rang tshugs thub pa）あり方（sdod lugs）を指して「自立的なもの」と言うべきである．（LR, 487a3-4）

〔反論者：〕〔ものが〕自立的であること（rang dbang ba'i ngo bo）を，効果を生む働き〔があるということ，すなわち〕縁起するということによって否定し，自立的でないことが縁起することの意味であると〔あなたが主張〕するならば，〔そのことで〕あなたは私の何を否定しているのか．なぜならば，我々もまた効果を生み出す働きとしての縁起を認めているからである，したがって，あなた〔の主張〕と私〔の主張〕には違いはない．

〔ツォンカパ：〕あなたは因果〔関係としての〕縁起を承認しているけれども，幼児が，鏡に映った顔の像を本当の顔であると考えているのと同様に，その縁起〔するもの〕を，自性によって成立しているものであると増益し，〔それが，当の〕事物自身に他ならないと述べているのである．（LR, 487b4-6）

もし，自性（ここでは自立的なもの）が他のものに依存していないものを指しているとすると，それは縁起することと矛盾するが，しかし，仏教徒である限り，因縁に依拠して生じるという意味での縁起を認めるので，他のものに依存しないものを認めることはなく，従ってそれを改めて否定する必要はない．またそれを否定しても，中観派の無自性・空の理解を得ることはできないと言う。ここで問われているのは，中観派のみが否定対象として想定することのできる，中観派に独自の自性の規定なのである．それに対するツォンカパの回答は，yul gyi steng du rang gi ngo bo'i sgo nas rang tshugs thub pa'isdod lugs というものであるが，これは極めて抽象的な規定であり，rang dbang ba という表現に少し言葉を足して言い換えたようなものである．また，ここでツォンカパは縁起の設定方法を問題にしてはいないが，縁起と自性が背反関係にあり，自性の規定の裏返しになったものが縁起の設定であるとするならば，中観派の独自の自性の設定方式は，同時に中観派独自の縁起の設定方式と対応しているはずである．この中観派，特に帰謬派独自の縁起理解と自性理解は中期以降の著作でより明確に表現されるようになる．

3.『善説心髄』における自性と名称

『善説心髄』は前半に唯識思想，後半に中観思想が取り上げられ，さらに中観思想を述べる部分の前半が自立派の思想，後半がツォンカパ自身の立場である帰謬派の思想に当てられている．その帰謬派の思想を述べる節のはじめで，「そのもの固有の特質によって成立しているもの（rang gi mtshan nyid kyis grub pa）」を言説においても承認しないことが実在論と決定的に相違する帰謬派独自の主張であることを標榜し，「それでは，どのようなものとして把握するならば，そのもの固有の特質によって成立しているものと捉えることになるのか」（LN, 65a3-4）という問いを掲げ，直截に rang gi mtshan nyid kyis grub pa の意味を説明している．

ツォンカパによれば，中観自立派を含む実在論者は，量（tshad ma）によって存在していると捉えられるすべてのものについて，その名称・命名の基体が対象の側に存在し（それは「自性（rang bzhin）」とも「そのもの固有の特質」とも「それ自体」とも言われる.），それが根拠となって命名が行われると主張するのに対し，帰謬派はそのような命名の基体は存在せず，それらの諸存在は，言説において仮説されただけのもの，分別知によって名付けられただけのもの（tha snyad du btags pa tsam, rtog pas btags pa tsam）であると主張する（LN, 65a4-b3）．実在論者は，諸存在の名称が対象自身の側にある特質ないし自性によって根拠づけられている，と考えているのに対し，帰謬派は，それら諸存在の命名の根拠が対象の側には存在せず，分別知，とりわけ言語的な意識にのみ還元される，と考えるのである．以上で「そのもの固有の特質によって成立するもの」と「分別知によって名付けられただけのもの」も対立の意味は明瞭であるとも考えられるが，これを自性と縁起の対立関係と重ね合わせることによって，より深い理解を得られると思われる．

4. 自性と縁起の矛盾関係

ツォンカパは『ラムリム小論』で，無自性を論証する論証因としての縁起に二種類を区別している（LRchung, 172a1-5）．一つは有為にのみ成り立つ「因縁によって生起する（rgyu rkyen la brten nas skye ba）」という意味での縁起，もう一つは，有為・無為のいずれにも成り立つ「依って仮設される（brten nas btags pa）」という意味での縁起である．この「依って仮設される」縁起は，ここではすべての存在が諸部分に依拠して仮設されるという関係として言及されている．

現代の研究者も，チャンドラキールティの註釈に基いて，縁起には時間的な因

果関係と論理的な相互依存の関係という二種類があること，そして後者こそが中観思想の中心的な縁起であると考えている[3]．ただし，そこでの論理的な関係は，概念の相互依存的な関係がまず念頭に置かれている点でここでのツォンカパの記述とは若干の違いはあるが，ツォンカパ自身も第二の縁起として相互依存的な関係に言及することもあるので[4]，概ね同じ立場であると見ることができる．

しかし，このような縁起は他の仏教諸派でも承認されている類のものである．部分に依って全体が仮設されるという例としてツォンカパが用いる車の比喩や，それによって説示される「五蘊によって我が仮設される」という無我説は，中観派ないしは帰謬派に独自のものではなく，初期仏教時代から用いられてきたものである．概念の相互依存的な成立に関する縁起も，『中論』で明示的に説かれている議論であるので，中観派一般で受け入れられている思想だと言える．これらの縁起説自体が帰謬派独自のものとは言えないと言うことは，先に引用した『ラムリム』における「我々も縁起を認めているのだから，そのことで我々の何を否定していることになるのか」という反論からも伺える．

またこの二種類の縁起は，我々の日常的な理解においても決して受け入れがたい説ではない．我々は作られたものがすべて何らかの原因に依って生じてきたのであり，一時的な存在であることは情動的にはともかくも理性的には知っているし，いかなるものも分割不可能な全体的一者であると考えることはない．しかしだからといって，我々が中観思想を悟っている訳ではないし，無自性を正しく理解していると言うこともできない．

ツォンカパは先の引用で「縁起を認めることは等しくても，自性を認めるか認めないかという違いがある」と答えていた．問題なのは，縁起と自性が矛盾しないと考える実在論者の自性の理解である．上に述べたように，「自性によって成立するもの」というのは，帰謬派の視点から捉えられた実在論の有自性の理解であり，それと決定的に対立し，逆転関係にあるのが，分別知によって名付けられただけのものという帰謬派独自の言説有の設定方式だからである．

5. 分別知に依存する

自性と縁起の対比は，それ自体に依存して成立するのか，他のものに依存して成立するのか，という拠り所としての自と他の対比であると考えられる．そのうち「依って仮設される」という場合の拠り所となる他のものは，上の例にもあるように，構成要素の諸部分であるとツォンカパは考えていたようである．しかし，

このような対比からだけでは，帰謬派独自の自性理解，縁起理解を導き出すことはできない．結論から言えば，仮設されるときに拠り所となる他のものは構成要素の諸部分などではなく，言語的意識としての分別知であると考えるべきである．ツォンカパは次のように拠り所たる「他のもの」が分別知であると強調している．

同様に諸存在の自体が，有境である言説の分別知という他のものに依存して，すなわちその力によって設定されたのではない自性のことを否定対象の我と言い，・・・(GR, 77b4)

ここで，他のものに依拠せずに，と言っているのは因縁に依拠しないということではなく，有境である言説知を他と言って，その力によって設定されたものではないので他のものに依拠しないのである．それ故，自立的であるというのは，それらの対象が，それぞれ独自のあり方をしていること（rang rang gi gnas lugs sam sdod lugs thun mong min pa'i ngo bo）である．それを「それ自体」とか「それ固有の自性」と言うのである．・・・それ故，内なる意識の力によって設定されたのではなく，それ自体のあり方として，対象の上に成立しているものを「我」とか「自性」とか言うのであり，・・・(LR, 425b5-426a6)

「自性によって成立するもの」と「名付けられただけのもの」の対比を，その対象の存在の成立根拠が，対象自身の側に存在する基体であると考えるか，命名する分別知であると考えるかという対比として理解できるとするならば，そして，ここに自性と縁起の対比を重ね合わせるとするならば，名付けられただけのものが依拠している他のものは，他の存在ではなく，真に他のものである有境の分別知であると考えるのは，自然な理解であろう．

6. 帰謬派独自の縁起の意味

以上から帰謬派独自の縁起は，あらゆる存在が，すべて一方的に命名する分別知のみに依拠して設定され成立することと考えることができる．これまで，特に断りなく「成立する」「設定される」という訳語を用いてきたが，これらを整理してみると次のような二つのグループに分けられる．

rang gi matshan nyid kyis grub pa	rtog pas btags pa tsam
rang bzhin gyis grub pa	rtog pas bzhag pa tsam
rang gi ngo bos grub pa	ming btags pa tsam
rang gi ngo bo'i sgo nas grub pa	brten nas btags pa

これを見ると，明らかに「成立すること」と「設定されること・仮設されること」とが対比されているのが分かる．自己に由来するものに「成立する」という語が用いられ，他のものに由来するものに「設定・仮設される」という語が用いられている．右側の系列が帰謬派の縁起を意味しているとするならば，そして，有為・

無為に共通する縁起の「起」の解釈として grub pa という語が用いられていることを考えると[5]，「設定される」というのも，その存在が「成立する」一つの形態であると考えることができるであろう．分別知によって仮設されるというのが，そのものの「成立の仕方」である．ここで対比されているのは，当該対象がそのようなものとして成立するその仕方である．「そのもの固有の特質によって成立する (rang gi mtshan nyid kyis grub pa)」というときの「成立する（grub pa)」は，縁起をも含むより広い意味での「成立の仕方」の一つとして使われていたと考えられ，そのより広い意味で通約することにより，自性と縁起とが，事実上だけではなく，内容的にも密接に関係する対立概念であることが見て取れるようになるであろう．

【略号表】以下は全てツォンカパ作．ラサ（シュル）版全集を使用．LR : *Lam rim chen mo* (vol. Pa ; 東北番号 5392)．LN : *Legs bshad snying po* (vol. Pha ; 東北番号 5396)．RG : *Rigs pai rgya mtsho* (vol. Ba ; 東北番号 5401)．LRchung : *Lam rim chung ngu* (vol. Pha ; 東北番号 5392)．GR : *dGongs pa rab gsal* (vol. Ma ; 東北番号 5408)．

【注】

1) 拙稿「ツォンカパにおける縁起と空の存在論 : 中観派の不共の勝法について」『とんぱ』3，出帆新社（1999）参照．

2) 拙稿「ツォンカパにおける中観自立派の存在論」『日本西蔵学会々報』44（1999）参照．

3) 例えば，梶山雄一『仏教の思想 3 : 空の論理〈中観〉』角川書店（1969），中村元『空の論理』(『決定版・中村元選集』22）春秋社（1994）など．吉水千鶴子氏は一連の論考で，概念的な相互依存関係として縁起を考えることに対する批判的な見解を提起されている（「On raṅ gi mtshan ñid kyis grub pa Ⅲ, section Ⅱ and Ⅲ」『成田山仏教研究所紀要』17，1994 ;「Upādānaprajñapti について : Mūlamadhyamakakārikā XXIV 18 を考える」『成田山仏教研究所紀要』20，1997)．

4) 上記の諸研究にあるように『中論』では概念が相互依存的に成立することを主張する例が多く，ツォンカパも当然それらに言及している．例えば，「能生・所生，行くことと行く人，諸見・能見，量・所量など一切はそれ自体で成立しているものではなく，相互に依存して成立しているだけのものと知るべきである．」(LR, 482b6-483a1)

5) 『中論』の帰敬偈にある縁起の語義解釈の箇所で，有為・無為に共通する縁起の「起 (byung ba)」には，生起という意味と成立という二義があると指摘されている（RG, 11a6-b3)．

6) このような理解は筆者の独創ではない。例えば lCang skya rol pai rdo rje, *Grub mtha, thub bstan lhun po'i mdzes rgyan,* 中国蔵学出版社（1989)，pp. 309-311.

〈キーワード〉 ツォンカパ，縁起，帰謬派

（東洋文庫専任研究員）